

# エコ. エコ (ecology. economy)

## 特定非営利活動法人 エコ. エコ

「見沼たんぼ」は先人たちから現代人への贈り物

二宮靖男（森林インストラクター）

はじめに

私の小学生時代は昆虫少年であった。夏休みには勉強もせずに昆虫網をもって、もっぱら野山を駆け回っていた。そんなワンパターンの姿を見て、近所のおばさんに「また今日も」と笑われたものである。あるとき、大人から、「見沼にはいろんなトンボがいるよ」と聞かされ、自然豊かな、見沼の水辺に憧れをもった。東の方だということから、大宮の日進から道筋もよく調べずに捕虫網を持って、暑い盛りに、やみくもに東に向かって歩き、見沼を目指した。しかし、途中で迷子になってあきらめ戻った記憶がある。



この夏にとうとう古希を迎えて、折にふれては戦後間もない少年時代を思い起こすことが多い。当時はテレビ、ゲームなどなくラジオの世代、子どもたちの遊びと言えば、必需品「肥後守」で雑木を削って刀を作ってチャンバラごっこ、あるいは野山の探検ごっこであった。また、社寺の境内も日常の遊び場であった。ヤマとよばれた雑木林には、ヤマユリ、リンドウ、クサボケなどふつうに自生していた。



土器ひろいや粘土掘りにもよく行った。郷土の自然や歴史に興味を持った中学生時代、そんな下地があったのか、いま、少年時代がよみがえったかの如く、自然観察会、歴史散歩などで、再び野山を駆け巡るシルバー時代を謳歌している。サラリーマン卒業後、10年、こうした体験をふまえて、独断と偏見となるかもしれないが、以下、自分の知る見沼の魅力をまとめてみたい。

### 見沼たんぼとは

地形的には、かつての古芝川ともいべき流れが大宮台地を開析、これによって生まれたY字形の浸食谷が「見沼たんぼ」の前身である。俗に鹿の角のような形状ともいわれる。歴史的には、江戸初期に八丁堤を築いて見沼溜井を造った伊奈半十郎忠治の存在を忘れてはならない。これが見沼開発の第一ステージである。これによって、八丁堤の下手に水田が生まれ、各村は潤うようになる。しかし、時を経て、享保年間になると、江戸の人口が急増、コメ不足の時代背景下、米将軍とよばれた8代将軍吉宗の命で、見沼開発が進められ、この任に当たったのがご存知、井澤弥惣兵衛為永である。見沼自然公園に建てられたあの銅像の人物である。弥惣兵衛は、周到な調査を経て、利根川から取水、伏越、掛け樋などの工法を駆使、着工から約5ヶ月で用水路を開削。これが見沼に代わる用水ということで見沼代用水と呼ばれるようになる。同時に八丁堤を切り開き、見沼溜井を干拓、中悪水路を開削して芝川につなげ、享保13年（1728）、見沼たんぼが完成する。



井澤弥惣兵衛為永銅像 (見沼自然公園)

3年後、江戸への年貢米の舟運のため、附島、木曾呂を結ぶ八丁堤に、閘門式運河の通船堀も構築され、見沼たんぼのインフラが整備され、江戸の米需要の一端を担う穀倉地帯が誕生した。見沼たんぼ誕生には弥惣兵衛にまつわる龍伝説をはじめ多くの逸話が秘められている。

# Newsletter No.7

見沼は自然・歴史・文化の玉手箱 現在、見沼たんぼ地域をフィールドにネットワークを結んで活動する市民活動団体は、本紙発行元のエコエコはじめ35団体ある。そのフィールドは水田・畑などの農地、斜面林、河川、公園、遊水池などで、そのほとんどが見沼たんぼの環境を保全し、次世代に伝えていく活動をしている団体である。また、こうした地域の魅力を伝えるガイドの会もある。これら35団体の他、トラスト1号地の活動、見沼の龍神まつりなど行事・習俗、芸能を伝承する会、各地域の歴史研究会、文学や影絵の会、ハイキング、ウォーキングなどのスポーツ愛好者の会、レクリエーション活動のグループなどあって、見沼たんぼ地域を愛好するグループは枚挙に暇がない。このように愛好される「見沼たんぼ」は、多岐にわたる市民のニーズを満たし、新たな発見を教えてくれる自然・歴史・文化の玉手箱といえよう。

## 見沼たんぼの魅力とは

見沼たんぼの魅力とは これだけの市民が活動する見沼たんぼの魅力は一体どこにあるのか。(なお、以下「見沼たんぼ」とは、大宮台地の社寺、斜面林を含めた一帯の「見沼たんぼ地域」の意で用いる)。

見沼たんぼの人気を物語るものに多種多様な見沼たんぼ情報がある。見沼の歴史を著した史誌・文献、自然、保全の現状を伝える報告書、論文資料、また各公共機関からの市民向けのパンフレット、リーフレット、ガイドマップなど、インターネットでも発信され、見沼たんぼの情報は巷にあふれている。見沼たんぼを伝える情報誌には、よく「お宝」という形容がキャップレズに登場する。「さいたま市10周年記念誌」には「見沼たんぼはみんなの宝もの」、最近刊行の「緑区お宝100選」を見るとそのお宝のほとんどは見沼たんぼ地域から選ばれている。見沼たんぼにはどうしてお宝が多いのか。その魅力の源泉は何なのか、次のことが要件としてあげられるのではないだろうか。

1. まず首都圏有数の平地的緑地空間が存在していることがあげられる。水田面積は土地利用区分の6.1%に過ぎないが、畑地、公園など含め、急速な都市化の波の中でも約1,200ha(東京ドーム約268個分)の歴史と文化のある大規模緑地空間(環境資産)が残った。これは見沼三原則など開発の規制をかけた行政はじめ市民の高い見識もあってのことでもある。
2. 江戸地廻り経済圏として、豊かで、教育文化の高い地域であった。こうした風土が正風遠州流の華道家の守屋巖松齋、山田の案山子の作詞家の武笠三はじめ多くの人物を輩出、多様な文化を育み、多くの自然遺産、文化遺産をもたらした。
3. 大宮台地、斜面林、代用水、田んぼ、芝川など平地ながら地形の変化もあって自然環境の多様性があること、また、昔日には及ばないものの少なからず生物の多様性が維持され、自然に親しむ環境が残されていること。
4. 氷川三社(氷川神社・中山神社・氷川女体神社)はじめ各地区の鎮守の森、寺院を中心として祭祀など信仰に培われた民俗・文化の伝承があること。
5. 加田屋、上山口などに見沼たんぼの農ある風景が残っていること。ファーム21はじめ見沼の農をつたえるグループの活動によって、見沼たんぼの原風景を保全、体験型農業が継承されていること。
6. 大宮公園、合併見沼公園、見沼自然公園、見沼氷川公園、大崎公園、川口自然公園など市民憩いの場、活動のフィールドがあること。
7. 植木の里安行に隣接、花き園芸文化が盛んであること。田んぼが畑に代わったが、サクラや花木の圃場など、春先は桃源郷のような景が楽しめる。

日常に飽いたら、四季折々の楽しみがある見沼たんぼを訪れてほしい。ここは、先人たちが現代の私たちにプレゼントしてくれた、すばらしい玉手箱のような大緑地空間である。



今後の予定(毎月第4日曜日)

見沼自然公園

10月26日

森の不思議



11月23日

落ち葉で遊ぼう

12月28日

野鳥を観察しよう



1月26日

風と遊ぼう

2月23日

空気って何だろう

3月23日

土と遊ぼう



## 活動

場所

さいたま市緑区 南部領社  
トラスト1号地西側  
第2木曜日  
第3金曜日



トラスト1号地付近



ノウルシの群落



山田の案山子



アオサギ



氷川神社

NPO法人 エコ・エコ  
活動を御支援ください

問い合わせ先 メール kaerunomaru@gmail.com Tel&Fax 048-874-9811(加倉井)  
寄付送金先 郵便振替 0110-0-711005